サリンジャー文学における *The Catcher in the Rye* 論

高　橋　雅　子

1951年にＪ．Ｄ．サリンジャー（ Jerome David Salinger, 1919— ）によって描かれた *The Catcher in the Rye* は，彼の唯一の長編小説であると共に，その出版を機にサリンジャーが隠遁生活を開始するという，サリンジャー文学内における意味的背景をも持つ作品である。

では，サリンジャーは何故隠遁生活を始めたのだろうか？

1962年の朝日新聞によれば「サリンジャーが隠遁生活に入ったのは，禅に没入する為である。」との見解が打ち出されているが，果してそれだけの理由であるのだろうか？　それによしんば隠遁生活が禅に没入する為のものであっても，サリンジャーをして禅に没入させた要因は一体何であったのか？　何が彼をして禅の思想に接近させたのか？　これを解明すべく行なった研究を，私はここに記したいと思う。何故，サリンジャーは禅に没入せねばならなかったのか？私は，この問いをふまえながら禅に入るまでのサリンジャー思想を，彼の作品である *The Catcher in the Rye* を中心にして明確化していきたいと思う。

I. *The Catcher in the Rye* 考察

> If you really want to hear about it, the first thing you'll probably want to know is where I was born, and what my lousy childhood was like, and how my parents were occupied and all before they had me, and all that David Copperfield kind of crap, but I don't fell like going into it.(1)

この文で始まる *The Catcher in the Rye* の主人公 Holden Caul-

field の口調は，何故かしら口を濁すような感を読者に与える。言いたくないことを渋々と口に出す印象を与えるのである。その理由は読者が，Holden の代弁者的饒舌に引きこまれてついついこの本を読み終えてしまうその時になって初めて明かされるのである。Holden はサナトリウムに入院しているのである。Holden はサナトリウムにいて，デイヴィッド・コパフィールド的身の上話なんかしたくもないんだと言いながら，彼のサナトリウム入院直前の3日間の身の上話を始めるのである。従って，最後の章で，

> D. B. asked me what I thought about all this stuff I just finished telling you about. I didn't know what the hell to say. If you want to know the truth, I don't know what I think about it.(2)

と，Holden の兄であるD．B.が彼に尋ねる「一体今まで起こったことをどのように思ってるんだい？」という質問に対しても，Holden は「何て言ったらいいのか，そんなことわかんないよ。実を言うと，僕がどういう風に思っているのかさえ，ほんとはわからないんだ。」と，彼の話したくない感情を示すのである。

では，何が Holden をサナトリウムへと行かさしめたのだろうか？これは，Holden の憂鬱(depression)が多いに関係していると思われる。そこで，次にこの問題を考えてみたい。

それでは，Holden のdepressionは何によって生じたのだろうか？それは，次の2つの外傷によるのである。(1)精神的外傷，(2)肉体的外傷。

Holden は最初から傷ついた状態で登場する。ペンシー高校でフェンシングのマネージャーをしていた彼は，試合に行く途中，地下鉄でフェンシングの道具を置き忘れてしまう。その為，試合はお流れとなり，フェンシングチームのメンバーは Holden を仲間はずれにする。仕方なくペンシー高校に戻ってきた Holden は，その足で，歴史を担当するス

ペンサー先生に Good-bye を言いに行く。この作品は，いわば Holden がスペンサー先生に Good-bye を言う所より展開されていくのである。"They kicked me out". 5課目のうち4課目落した Holden は，学校より退学処分を受けていたのである。さらには，スペンサー先生と Holden の会話のうちに，Holden は以前にも3つの学校をやめていることがわかるのである。Holden の最初のdepressionは，風邪をひいたスペンサー先生の部屋の薬の臭いやら，年老いたスペンサー先生の洗濯板のような胸を見たせいだと，Holden 自身は言うのだが，その背後にはGood-bye を言わなければならない彼の精神的外傷が意味深く根をおろしているのである。そんなことにはとんと無頓着なスペンサー先生は，自分がどうして歴史でHoldenを落としたかをとくとくと話し始め，最後には，"What would you have done in my place?" と Holden に尋ねるのである。 弁護士を父親に持つ中流階級の家庭に育った Holden には

> I told him I was a real moron, and all that stuff. I told him how I would've done exactly the same thing if I'd been in his place, and how most people didn't appreciate how tough it is being a teacher.(3)

と言うだけの躾が備わっていた。心の中ではどんなにスペンサー先生の悪意のない——それだけに一層偽善めいて聞こえる言葉に，へどを吐くようだと悪態をつきながらも，それを相手に面と向かって言えるような立場にも環境にもHoldenはいないのである。その悪態は，ただ Holden 自身の胸中に蓄積されていくだけである。大人の ego をも含むスペンサー先生の質問に，「きっと僕だって先生と同じことをしたと思いますよ。」と答えねばならない Holden の身上は，彼の持つ精神的外傷を増増助長させる趣きを暗示しているのである。

Holden の精神的外傷はそれだけに止まらない。少女 Jane の面影

も，弟 Allie の突然の死も彼に意味深く精神的外傷を与えている。

> Then she (Jane) really started to cry, and the next thing I knew, I was kissing her all over ——anywhere——her eyes, her nose, her forehead, her eyebrows and all, her ears——her whole face except her mouth and all.(4)

Jane に対する Holden の愛は Platonic love であった。それだけに一層 Holden の内部でその愛が絶対化されるのである。Jane の流した涙を，Holden が拭ってやることで，2人は同時に同化されうるのである。この時の Holden の愛こそ，サリンジャーの理想の愛の形ではなかろうか？ Jane は再び家族と共に別の地に移り，Holden には精神的外傷だけが残されることになる。

Allie の死に関しても同じことが言えるであろう。当時13歳であった Holden にとって，死は巨大な怪物であった。何の理由もなしに，自分の愛する者を奪ってしまったのである。その死に向かって，Holdenのなし得ることは，ただ，ガレージの窓ガラスを砕くぐらいのことであった。そして，その感情は Holden に God damn, as hell, lousy などの怒りの言葉を植えつけてしまう。その怒りの言葉は徐々に社会に対して向けられていくようになるのだが，この時点において，それは漠然とした死に対する怒りに他ならないのである。

これらの精神的外傷と相俟って，Holden には肉体的外傷が与えられている。それは，サリンジャーの技巧ではあるのだが，Holden が I'm quite a nervcus guy. あるいは I'm psychic. あるいは I'm so damn skinny. と自分を説明する描写は，明らかに Holden が depression を生じやすい状況下にあることを物語っているのである。

では，サリンジャーはこのように主人公 Holden に deprossion を与えて何をさせしめようとしたのであろうか？ Holden は学校から追い出される以前に，自ら学校を飛び出すのである。これは，他の作品に

も見られるサリンジャー思想のひとつ，depression 削減であると私には思われる。サリンジャー作品初期のものにはこれを Theme にしているものが数多く見られ，今ひとつ“Blue Melody”（1948年）を例にとって，これを解釈してみたい。

15年間も会わずにいた幼なじみのラドフォードとペギィは偶然にビルトモァ・ホテルで再会する。2人は，ライダ・ルイーズの思い出によって今でも繋がっている彼ら自身を見い出す。しかし，ラドフォードはライダ・ルイーズの思い出が強烈であればある程，その思い出に触れたくないのである。ライダ・ルイーズのレコードと同じ様に，少年時代の暗い陰翳（これは，アメリカ社会における黒人問題の汚点である）として傷を抱いてしまった大人のラドフォードの心は，もはや何の感情も受けつけないのである。再会の嬉びと懐しさにぜひとも電話をかけるようにというペギィの申し出に，彼が応じないのも，又，ライダ・ルイーズのレコードを誰のためにもかけないという彼の考えも，その故なのである。それは傷ついた人間の最後の防衛本能ではないだろうか？　ライダ・ルイーズの思い出を分かちあったペギィを遠ざけるラドフォードの態度には，明らかに，悲しみに対する拒絶があると私は考えるのである。

“Blue Melody”はここで作品の完結を見るわけだが，その後3年を経て書かれた“The Catcher in the Roy”においては，もうサリンジャーは主人公に悲しみに対する身構えの態度をとらせるだけで済ませるわけにはいかなくなるのである。ここで，サリンジャーは Holden に depression の拒絶であると同時に，追求の形を持つべく学校を飛び出すという行為をとらせるのである。Holden の3日間の放浪はまさにその為にあった。3日間の放浪において，Holden は彼の抱く精神的，肉体的外傷を治癒するがごとく人間同士の繋がりを求めるのである。それは，自分の意志ではなくして学校を退学させられ，友人同士の絆を断ち切られた Holden の自分自身に対する代償行為なのである。死んだ弟 Allie に向かって

Okay, Go home and get your bike and meet me in front of Bobby's house.[5]

と言うことによって気を晴らす Holden の感情も，彼が生前の Allie の望みを叶えてあげなかったという自責にも似た精神的外傷に対する彼自身の代償行為なのである。

では，3日間の放浪でますます募らせた Holden の社会的欺瞞による外傷の治癒を彼はどこに求めたのであろうか？ 彼は，その治癒を彼の理想郷のうちに求めるのである。その理想郷はどこかの西部の田舎町である。Holden はそこに行って，啞でつんぼのまねをして，人の車の gas などを入れて暮らすと言う。そうすれば，誰とも無益なばかばかしい話をしなくても済むからだと理由づけるのである。

この社会との断絶こそ，社会的偽善によって受けた Holden の精神的外傷を治癒すべきものなのである。

ところが，よしんば，作者であるサリンジャーが，社会と自分との偽善を遮断することに成功したとしても，彼の創造物である Holden には社会を遮断する業は与えられていないのである。それは，Holden がいまだ未成年であるという被保護者の立場ばかりでなく，サリンジャー思想の今ひとつの Theme 「救済」の問題にも関与するのである。

怒り—拒絶—放浪—追求—治癒の最後には，救済がなければならない，とサリンジャーは考えているに相違ない。

I was damn near howling, I felt so damn happy, if you want to know the truth. I don't know why. It was just that she looked so damn nice, the way she kept going round and round, in her blue coat and all.[6]

Holden は，真実の愛を持つ純粋で無垢な妹 Phoebe の回転木馬にまたがった姿を眺めながら，「あるがままの人間の美しさ」を認めるという

悟りを開くのである。それは，又，Holden にとって救済でもあり得たのである。

かくして，悟りという禅の思想にも似た感情でもって，Holden は，真実の愛と無垢な純粋さを備えた者ならば誰でも救済者になれることを認識し，「ライ麦畑の捕え手」になりたいと願う Holden の願望もここで成就されるのである。

II. *The Catcher in the Rye* 位相

The Catcher in the Rye 考察の次に，この作品はサリンジャー文学においてどのような位置にあるのか，又その役割は何なのか，を私は考えてみたい。その為に，私はサリンジャーの作品を大きく3つに分類してみたのである。

1940年，彼が21歳の時に書いた処女作 "The Young Folks" から1951年の "Pretty Mouth and Green My Eyes" までが第1群。第2群が1951年の "The Catcher in the Rye"。第3群が，1953年の "De Daumier-Smith's Blue Period" から，1959年の「シーモア序論」に至る作品である。

第1群に入れたものは，いずれも短編，中編の作品であり，強いて分けるとすれば，これらは戦争に関するものと，そうでないものとに大別できるのであるが，これら全編の根底に共通に流れるものは人間の抱く悲哀である。それは怒りを含む悲哀なのである。諸氏が述べておられるのと同様，私もサリンジャーは反戦作家ではないと思う。彼の作品内における「誰が悪いわけでもない」という彼の態度こそ，それを示していると思われるからである。そして，それ故に人間の回避することのできない悲哀がにじみ出もするのであろう。"Blue Melody" に至っては，その色彩が著しく，それに対する怒りが一番のクライマックスにもなっている。しかし，サリンジャーは一種独特の手法を持っている。その怒りをあちこちで読者に見せながら，彼はそれを決して爆発させない。怒り

の陰に姿を隠してそれを楽しんでいるかのようにすら読者には感じられる。それはある種の超越と受け取れないこともないのだが，ここまでの作品においては，彼の宗教的超越の傾向はまだ示されていないのである。ここまでの作品は怒りを内部へ設定するサリンジャー思想の一段階と言えるであろう。

この怒りが明らかに表に表わされるのは，"The Catcher in the Rye" の作中においてである。 彼はここで少年の姿を借りて怒りを爆発させているのである。それは，少年が青年へと移り変わる時期のひとつの過程として無理なく表面に表われている。怒りの顕著たる表われは "God damn, as hell, for chrissake, lousy, bastard, phoney" などの Holden の言葉であり，しかもそれらはほとんどが，Holden の感情を通しての，偽善，インチキ，まやかしの類に向けられているのである。それは，"The Catcher in the Rye" に至ると，怒りの対象物がはっきりと浮きでてくるせいもあるのだろう。 怒りの爆発。これが，サリンジャー文学におけるこの作品の持つ意味なのである。さらに，サリンジャーはこの作品に，救済という今まで彼の持たなかった Theme を与えるのである。ここに，サリンジャーが何故この作品を書かねばならなかったかという疑問の答えが用意されている。この作品においては，今までの彼の作品内で蓄積された怒りを超越して， さらに高度な思想へとサリンジャー自身が進まねばならなかったのである。 サリンジャーはそこで救済の Theme を持ち出した。これが，彼が "The Catcher in the Rye" を書いた意図でもあるのである。"The Catcher in the Rye" 考察において，私は Holden が種々の精神的外傷によって傷ついた状態で登場したのだと述べた。そして，これは又作者サリンジャーの精神的外傷でもあった。

"The Catcher in the Rye" が書かれた年月より溯ること11年前に世界は第2次世界大戦に巻き込まれ，その頃よりサリンジャーの作家活動も本格的に始まるのである。4年後の1942年，23歳になる彼は合衆国陸軍に徴兵された。それより1945年の終戦を迎えるまで，戦いを交えなが

ら蛸壺で作家稼業を続けたという彼の作品には，戦争の体験を題材としたものも随分とあるが，ここで特に注目したいのは，戦争で愛人を失った女性を描いた“Uncle Wiggily in Conneticut”（1948年），並びに，戦争の無意味さを訴える“Just Before the War with the Eskimos”（1948年）である。

この頃に至っては，はっきりと戦争に対するサリンジャーの否定的態度が表われてきており，戦争という社会の産物に傷つけられた作者自身の内に潜在する emotion が“The Catcher in the Rye”の主人公 Holden を作り上げたのである。従って Holden はたった16歳の少年ではあるが，十二分に大人の要素を持ち得るのである。野崎氏も指摘するように，Holden の頭の半分が白髪で埋まっているということが，それをつぶさに物語っていると言えよう。

その反面，子供の要素をも多分に兼ね備えた Holden 少年は，どんなに放浪しても，彼が持つ子供の要素故に必ず救済されうるのである。大人に比べて，子供には何らかの形で，庇護の手が差し延べられていることを，読者も，そして作者自身もよく知っているからである。その意味でも作者は主人公 Holden の設定に16歳という年を選んだのだと思われる。作品“The Catcher in the Rye”におけるこのようなサリンジャー文学の重要な転換期ともなる Theme「救済」の出現は他力本願より自力本願の形となって具象化される。それは，禅へと進む過程でもある。

武田勝彦氏の年譜によれば，サリンジャーは，「1946年には，ニューヨークのパーク・アヴェニューに両親と住み，夜は芸術家の集まるグリニッジ・ヴィレッジで，当時さほど流行していなかった禅仏教について盛んに議論していた」らしい。その事実に基づくなら，それより5年を経て出版された“The Catcher in the Rye”の作中には明らかに禅思想の反映が何らかの形で表われる筈である。「そもそも禅の公案は，合理的な解答を要求するものではなくて，その公案の課題に対する精神集中を契機として『自我』を捨てて，主客合一の境地を瞬間的な啓示として体験させることを目指すもの。」という斉藤忠利氏の禅の解釈を参考にする

ならば，まさしく“The Catcher in the Rye”には瞬間的な啓示を表わす言葉 All of a sudden がたびたび使用されていて，ここに禅の思想とサリンジャー思想との一致が見られるのである。

“The Catcher in the Rye”以後，第3群のサリンジャー作品が禅の思想を色濃く表わし始め，“Franny and Zooey”に至っては，Franny が世間を取り巻く ego の為に押しつぶされそうになる時，唱える言葉が経の類のものであること，又，彼女を救った兄 Zooey の言葉「太ったどこにでもいるおばさん」が仏の image を持つことにより，サリンジャーが本格的に宗教的主題に取り組む作家となったことが伺える。

以上のことより鑑みても“The Catcher in the Rye”はサリンジャー文学における初期の作品と後期の作品との中間ともなるべき位置にあり，サリンジャー哲学が，怒りの設定より宗教的救済へと移行する過程を示す作品と見ることができるのである。そして，ここにこそサリンジャーの宗教的思想の移行による隠遁生活というものの必要性が生じて来るのではなかろうかと私には思われるのである。

Notes

(1) J.D.Salinger: The Catcher in the Rye p.5
(2) Ibid., p.220
(3) Ibid., p.17
(4) Ibid., p.83
(5) Ibid., p.104
(6) Ibid., p.219